さざなみ国語教室

さざなみ国語教室
第490号　2023年1月25日
発行者代表　吉永幸司
連絡先　大津市柳川2-11-5
℡ 077-522-1008
発行所　滋賀児童文化協会
NPO 現代の教育問題研究所

もう僕達かえります。
ー卒業式のあとでー

高丸　もと子

「先生へ　もう、僕達帰ります。さようなら。みんなより」

計算プリントの裏に書かれてあったこのメモを、私は今も写真立てに入れて飾っている。

卒業式が終わった後、一旦家に帰った子どもたちの何人かが教室に戻ってきて、このメモを残して行ったらしい。ベランダには水を流した跡が残っていた。雀が最後に食べ散らかしていったのを、隅々まできれいに掃除をしてくれていた。名前を書かずに「みんなより」となっている。

六年生の一学期のはじめ、誰かがベランダに捨てた給食のパン屑がきっかけで雀が来るようになった。水替え、糞の始末はその日の当番がやることになり、雀の好きな稲もバケツでも育てることになった。稲に群がる囀りはさながら森の中の教室のようだった。子どもたちが特別教室に行って留守の時は、中まで入ってきてあちこち探検するのもいた。「ただいまあ！」の声と共にパニックになり逃げ出す姿には思わず笑ってしまった。真冬にはふくら雀になって日向ぼっこをしてる姿が可愛く、子どもたちは驚かせないようにと、押し合いしながらもそっと見ていた。

「もうぼくたち帰ります…」さりげないこのメモの言葉に、私は初めて引き留められない大きなものを思った。それぞれが帰るところに帰っていくのだ。全員揃ってこの教室に帰ってくることは今日を境にもうない。当たり前だった日々から変わる日。それが「式」という引き際で、そこには目に見えない誰もが納得する約束があると知った。

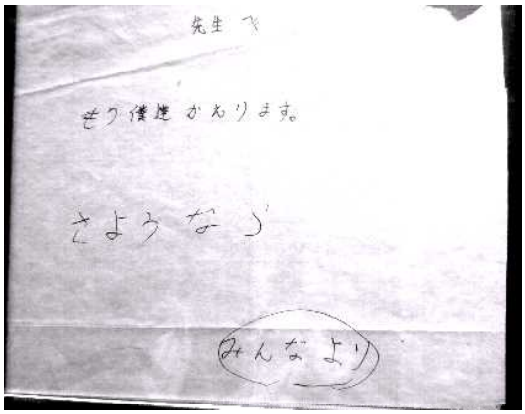
命あるものはいずれみな自然の巡りの中へと還っていくのもそうだ。

中国語では「ただいま」を「我回来了」という。巡り回って無事にここに帰って来ました。であり、さよならは「再見」。再びまみえる約束を思ってのさよなら。日本語の「さよなら」は接続詞だ。「（さよう）である（なら）ば致し方のないことで」別れることへの諦めの美しい響きを持つ言葉だ。

「さようなら」私も呟いてみる。教室が急に広く感じられた。壁の時計もいつもより、はっきりした音で時を刻んでいく。

スズメが入って来たかと思うと、すぐに飛んでいった。「もうボクたちかえります」スズメが残していった言葉のようにも思えた。

（国語研究大阪恵雨会代表）



さざなみ

▼国語科４年教材に「伝統工芸のよさを伝えよう」（光村図書）があります。教材のリード文は、「伝統工芸のよさについて調べ、理由とともにリーフレットにまとめ、友達に知らせましょう」と内容と活動を示しています▼参観した授業は、グループごとに調べ、まとめるという形態で進んでいました。その時間は、「初め・中・終わり」の組み立ての「中」を考え「説明する文章を考え書く」という段階でした。一つのグループは、「信楽焼」について「魅力」について書くことを議論をしていました。書く内容を二つにすることで意見が分かれたのです▼議論の内容から推測して分かったのは、グループには、実際に信楽焼の現場で取材をした子とインターネットや図書で調べた子がいることでした。学習活動の様子を参観しながら得たことは、「対話」に対する視点です。それは、考えた背景に違いがあることでした。「現場で調べた」「情報を集めた」ということは、相手が知らないことを知っているということ、つまり、それが学習のエネルギーになっていることでした▼同じ資料や体験をもとにして話し合うことの多い国語教室からの脱皮は、「対話力」を育てるとすれば、「知っていること・知らないこと」が話題になる議論も大事だするということを学んだ授業参観でした。（吉永幸司）

さざなみ国語教室のホームページ　http://www.eonet.ne.jp/~sazanamikokugo
NPO 法人 現代の教育問題研究所のホームページ　http://kokugo-npo.com/index.html　ご覧ください。

『大造じいさんとガン』

川部　長人

近江の国語実践研究会で『注文の多い料理店』の実践を発表し、そこで学んだことを生かして、次の物語文教材である『大造じいさんとガン（東京書籍・五年生）』の実践を行った。『注文の多い料理店』の実践では、単元の後半で「宮沢賢治解説ノート」を作ったが、課題が多すぎたため学習内容のしぼりこみが必要であった。『大造じいさんとガン』では、情景描写の効果と大造じいさんの人物像を中心に、子どもたちに何を学ばせたいかという学習内容をシンプルにした。また、さざなみの北川先生に授業づくりの相談にのってもらい、①内容の把握を確実に行うこと（音読などを通して時系列などをきちんと整理しておく）②ゴールイメージの共有とモデル提示（導入で何を学ぶのかを全員で確認しておく）③個人で解決する課題と全体で考える課題を分けること、というアドバイスをいただいた。

単元目標

・様子、行動、心情などを表す語句を増やすことができる。〔知識及び技能〕

・登場人物の心情変化について叙述を基にとらえ、自分の考えをまとめることができる。〔思考力、判断力、表現力等〕

・考えを伝え合い、自分の考えと比べることを通して、読みをさらに深めようとする。〔学びに向かう力、人間性等〕

単元計画

第一次

○物語を読み、気づきや感想から学習課題を設定する

・登場人物や物語の設定をとらえ、初発の感想を書き、交流する。

第二次

○大造じいさんと残雪の関係から主題を捉える

・大造じいさんが残雪を捕らえるためにおこなった作戦について確認する。

・情景描写と大造じいさんの心情を関連付けて読み、その効果を話し合う。

・大造じいさんの残雪に対する見方の変容を読み取り、行動を意味付け主題を捉える。

・朗読で表現する。

第三次

○表現の効果を捉えて「紹介文」にまとめる

・大造じいさんの心情や残雪との関係を表す効果的な表現を「紹介文」にまとめて、交流する

子どもの振り返りで「私は情景描写のよさに気づきました。例えば東の空が真っ赤に燃えて朝が来ましたという文章があります。初めこれを読んだとき、空が真っ赤に燃えるということが変だなと思いました。他の友だちの意見で、これは大造じいさんと残雪のお互い本気の戦いということを表現しているという意見に納得しました。アニメなどでよくある体の周りから火が燃えているようなイメージからなと思いました。イメージをふくらませてくれるという情景描写のよさがあるので、他の情景描写も見つけていきたいです。」とあった。椋鳩十の他の作品も学んだことを生かしながら読んでいってほしい。

（東近江市立能登川南小学校）

はじまりの大切さ

桑原　孟夢

“兎の登り坂”うさぎは後脚が長く、坂を登るのが得意であることから最も得意とする場所で力を発揮するということ。

今年の干支にちなんだ諺です。三年生はこの学校のミドルリーダーとしてのまとめの三学期となります。それぞれの得意を生かしてみんなのために活躍してください。

二〇二三年、新しい年のスタートです。気持ちを新たに、孟（はじ）まり・スタートを大切に楽しい三学期を送ってください。

これは三学期の始業式に黒板に書いて子どもたちに伝えたことだ。

昨年の四月から子どもたちには「はじまり」の大切さについてたびたび話してきた。「終わりよければすべてよし」と言うが、決してそうではないと自分は思う。始まりが良くなければ終わりが良くなることはないと考えているからだ。

二学期の子どもたちは、運動会やその他の行事などに頑張ろうという意識はあったものの、この学期を通してこれを頑張りたいという明確な目標を掲げている子どもは少なかった。行事が終わってしまうと目標がなくなってしまい、生活態度が一変してしまう子どもがいた。

三学期は三年生の学びにおいてまとめとなる学期であるとともに、四年生のゼロ学期とも言われ、次の学年へ向けて準備を始める学期でもある。

三学期のめあてを子どもたちに書かせると、「人の話を相手の目を見て聞く」や「どんなときでも字を丁寧に書く」といった少し先を見据えたことを書いている子どもが多かった。二学期の子どもたちの様子を見ていて、授業中におしゃべりをしてしまうや、ノートを書こうとしない様子が多々見られたり、学校の時間を守るなどのルールが守れなかったりしていた子どもがいた。そういった子どもが「ノートを早くきれいに書く」や「五分前行動をする」といった高すぎるのではないかと思う目標設定をしいた。しかし、三学期が始まってからを振り返ってみると、この目標を意識して、できなかったことを頑張ろうとするとても充実した日々を送れていると感じた。

ただ、充実した日々を送れているといってもまだ三学期は始まったばかりだ。とても良いスタートを切れた分、今度はこれを継続していけるように支えていきたいと思う。

（京都女子大学附属小学校）

お話づくりは楽しいぞ
（二年生）
北島　雅晴

お話の題材は「ふしぎなぼうし」。（以下、Ｔは教師、Ｃは児童。）

Ｔ「ふしぎ」ってどんなことでしょうか。

Ｃなんでだろうということ。

Ｃなんかよく分からないこと。

Ｃちょっとちがうぞということ。

Ｔ道を歩いていたらね、ぼうしが落ちていました。それがふしぎなんだけど、どんなぼうしか分かりますか。

Ｃお金のねだんを言うと、そのお金が出てくる。

Ｔそんなぼうしがあったら、先生もほしいな。

Ｃなんでも好きなものが出てくる。

Ｃ雨が降っていても、そのぼうしをかぶると、自分のまわりだけが晴れる。

Ｃ季節が変わる。寒い時にそのぼうしをかぶると、暖かくなります。

Ｃ亡くなった人と話ができるぼうしです。

Ｃそのぼうしをかぶると、いたずらをしてもばれない。

どんなお話にするのか、決定するわけではないが、いろいろと想像するのが楽しいし、お話づくりに向けての意欲が高まる。

その他、お話づくりに必要となるのは、

○登場人物（特に主人公）の決定。

○どんなお話にするのか、組み立ての決定。

などが考えられる。二年生という特性を考えると、「早くお話を書きたい。」と思う子が多い。できるだけ、お話づくりの準備を最小限にし、今回の学習では、「お話の組み立て」を考えることのみを指導した。

【お話の組み立て】

○はじめ　ぼうしとの出会い。
　　どんなぼうしなのか。

○なか１　困ったことが起こる。

○なか２　困ったことをそのぼうしを使って解決する。

○おわり　みんなが幸せになる。

という流れにしたがって、お話の組み立てを考える学習を行った。

二学期の国語科の学習をふり返って、学習作文を書いた。一番人気のあった学習が、「お手紙」の音読劇であった。二番目が、今回のお話づくり。

◇私はびっくりしました。なぜかというと、十二まいも用紙をつかったからです。なんで十二まいも書いたかというと、文を書いていたらお話を書くのが楽しくなってきたからです。何をがんばったかというと、人がしゃべるところと、どうやって終わるかという+ことです。（以下略）

お話づくり（創作文を書くこと）は、どの学年でも魅力ある学習になることが多い。

（野洲市立北野小学校）

「国語教育　校内研修『やまなし』」
川端　大介

三学期が始まり、１週間が終わった。週末に教職５年目までが集まって六人で『やまなし』の教材をどう授業するのかについて勉強会を行った時のことである。

「やまなし」の「五月」と「十二月」それぞれの幻灯を対比に焦点が当たった。対比の視点は、

①かにの兄弟の様子

②天井から落ちてきたもの

③情景描写、である。

ノートに本文を視写したり、想像したことを書き込んだりしながら一人読みを進めた。最後にそれぞれの読みを全体で交流した後、「イーハトーヴの夢」を読んだ。

賢治の理想や生き様について読み取り、感じたことを交流しあった。そして、最終課題『「やまなし」で賢治が伝えたかったことは何だろう』について考えた。ここでは、対比の視点②の「天井から落ちてきたもの」が何を表しているのかをヒントに考えた。

「五月のかわせみは、自然災害や病気などを表していると思う。かにの兄弟がすごくおびえていたからだ。十二月のやまなしは、よろこび、うれしさを表していると思う。賢治さんは、苦しい中にも喜びや希望を忘れずに生きることが大切だと伝えたかったんだと思う。」

「かわせみはみんなと同じで恐いものだけど、やまなしは賢治自身ではないかと思う。賢治は自分が病気の時でもていねいに教えたりしていて、いつもだれかのためにがんばっていたからだ。やまなしは最後は食べられるんだろうけど、食べたものには喜びを与える。そうやって人の役に立つことが伝えたかったんじゃないかなと思う。」

「五月のかわせみはいつ起こるか分からない自然災害や疫病などの恐いものを表していて、十二月のやまなしは希望を表していると思う。かにの親子は、やまなしを見てとてもわくわくしていた。苦しい農作業の中にも喜びを見いだす賢治さんの考え方が現れていると思った。」

「やまなし」の初発の感想については、「わけがわからない」「クラムボンって何？」という意見が大半を占めていた。また、二枚の幻灯を視点を決めて読み進めていっても、様子は想像できるが、賢治の伝えたいことまでは分からないという意見が出た。しかし、「イーハトーヴの夢」を読み、賢治という人物、理想や生き様を知り、それらと「やまなし」を重ねて、読みを深めることを確認することができた研修であった。

何度も読んだり、情景を想像するだけでなく、作者について詳しく知ることも読書を楽しむ方法であることを六人で学んだ。賢治の他の作品を読み比べる活動はもちろん、他の作者についても興味を持って、読書の幅を広げる意欲が持てる子どもたちを育てていけるよう指導していきたい。

（守山市立立入が丘小学校）

国語力の向上
～個人研究から学ぶ

川端　由起

今年は教職６年目であり、６年次研修と兼ねて、草津市の教育研究所に研究論文を提出するために１年間国語という教科と学級運営の有り方について考えてきた。今回はその研究論文の内容について触れてみたい。私は、国語力について、国語力を成す「考える力」「感じる力」「想像する力」「表す力」の育成を目指している。子どもには、真の課題解決能力を付けること、及び対象をどんな視点で見て、どのように考えていくかという思考力が必要であると考える。様々な言語活動を通して、言葉に着目する考え方を働かせて、学び合う国語の授業の工夫について１年間研究してみた。

また、言葉にこだわる子どもを育てるために、１年間を通して、子どもたちに身に付けさせたい「聞く・書く・話す・対話する」という４つの力の必要性である。付けさせたい４つの力とその内容は次の通りであり、このことを意識して授業を行った。まず聞くことは、聞き手の態度を教え、聞くことで、学びが広がり、深まることを実感させることである。次に話すことは、国語科以外にも話す機会を多く確保する。

子どもたちの反応を見て、教師が指示・発問して発言を引き出す。書くことは、書く楽しさが味わえるような学習活動を、数多く取り入れる。最後は対話することであるが、これは考えの違いに気づかせ、見方・考え方が広がり深まるようにする。

また、課題解決力を育てる授業展開も大切であると考えた。子どもたちがこの先働かせていくことができる思考力を獲得させるために、育てたい４つの力と共に以下の授業展開を基本とし、授業を実践したい。①学習課題の設定―何をめざすのかはっきりとさせる②学びの見通しの共有―見通しを共有し、学習過程を提示する③個人追究―個で取り組む機会を設ける④ペア対話／全体追究―対話のはたらきを使い分ける⑤精査・推敲―対話を踏まえ、再度個人で思考する⑥振り返り―３つのポイントで振り返る⑦活用／定着―価値づけし、活用を意識付けるである。

このような実践を重ねていく中で、児童は国語科の思考力・判断力・表現力を育成すること、及び、国語科の目標 にせまるためには、まず、考える力を育てる授業展開や、単元を貫く言語活動を設定した単元構想で、授業を行うことが大切であると考え、丁寧な授業を実践した。特に、単元を貫く活動においては、単元において児童に身に付けさせたい力を具体物として必ず作成した。これらは、児童にとっては、かなりの労力を要する学習であり、毎時間苦悩する姿が見られた。しかし、仲間同士で話し合い、教え合うことで、全員成果物を完成させることができた。また、次の単元に移った時、前単元で身に付けた力を児童が適用しており、驚かされることが多く、大きな成果があった。

また、対話することに力を入れることにより、文学的文章の登場人物の心情理解、説明的文章の要旨などの追及したい内容の獲得をしたいがために、特定の児童の発言を重視する授業は減った。また、対話といえども、教え込みからの脱却を目指すことばかりに注力して、ペアやグループで話したつもりの形式的な対話だけを行っていたのではないか、子どもたちの意見はきちんと反映出来ていたのか、と真剣に考えた。対話というものを根本から考え、子どもたちがどうやったら自分の意見を言えるか、他者の考えから何か学ぶことができないか、を追求することにより、一人ひとりが自身の意見を考え、全体に反映させることができた。

１年間を通して、目指す授業像、児童像があったからこその実践が出来たかと思う。次年度もさらに研究を重ねて児童の国語力・言葉力をあげていきたい。指導いただいた吉永先生に感謝します。

（草津市立志津小学校）

編集後記

▼一二月例会（四八九回）の提案は谷口さん（竜王小）研究教材は「モチモチの木」（３年・光村図書）研究主題は「人間力を育てる国語科授業づくり―小学校国語科における学習者の「問い」を生かした授業づくり」▼研究の動機として「心引かれる物語に出会った時の子どもは多くの疑問や思いとともに「問い」を持つという実態から、「学習に転じて見たとき」学習者としての子どもの「問い」は学習者自身のものとしてそれは学習者の発問としての「問い」は多くあるのだろうか。教師は生かされているのだろうか。「学習者が研究実践を支えているのであろうか」という問題意識が起動している。それは、日々の授業から生まれた誰もが持つ問題意識である。谷口さんの言葉を借りれば「従来までの「問い」作りを見てみると、学習者による「問い」作りの重要性は一貫して説かれているものの、実態としては、学習者自らの「問い」を追究できる場面は少なく、最後には教師が「○○の場面での（人物の気持ちは？）」というものに集約してしまっている」という指摘である▼提案内容は「学習者自らの文章に対する「問い」を核としながら探究に向かう姿を引き出したい」という考えから「ピラミット構造シート」「文章たんていノート」「こんな人物でSOSウインドウ」「学習で身につけた力（振り返り）」など多彩な学習活動で生き生きと学ぶ子供の姿がよく理解できる提案であった。（紙上提案であるため研究内容内容について同人それぞれが意見や感想はメールで交流）▼巻頭には、高丸もと子先生から、玉稿を頂きました。深謝。

（吉永幸司）